

青森に出て給仕として働いているうちに、五郎の胸の中にまた夢がふくらんでいきました。なんとか東京に出たいと思うようになりました。機会を得て、野田大参事に胸のうちをうちあけてみました。はじめはとりあわなかつた野田大参事は、ねばり強くなんでもやりぬく五郎の**人柄**を見抜いて、真剣に相談のつてくれるようになりました。

明治五年（五郎十四歳）の六月、野田豁道のはからいでいよいよ東京に出ることになりました。土地調査にきた大蔵省の役人の一行に、ついて行くことになったのです。途中、盛岡、仙台、福島などをへて東京に着いたのは、八月二十一日でした。青森を出発してから三カ月近くもかかっていました。（やつと東京に着いた）という安心感と喜びと、これからどうするかという不安とが入りまじった気持ちで東京の土を踏みしめていました。

この朝、五郎は、東京の入口、千住の街路を歩いていました。そのとき、前